

会議録

会議の名称	西東京市立学校給食運営審議会（第6回）
開催日時	平成29年2月17日（金）午後2時30分から午後3時55分
開催場所	田無小学校 ランチルーム
出席者	（委員）有澤会長、中村副会長・松村委員・小林委員・田中委員・佐藤委員・横張委員・中林委員・金木委員・山崎委員・小島委員・川添委員・横田委員・石川委員 （欠席）後藤委員・新出委員 （事務局）等々力学校運営課長・近藤・石部
議題	1 中学校給食について 2 その他
会議資料の名称	なし
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会議内容	
<p>出席委員15名、委員数16名で過半数に達しているため、本審議会の成立を確認。 前回会議録は、事前配付の資料に訂正の意見がなかったため、配付物のおりとする ことの確認。</p> <p>議題1 中学校給食について</p> <p>○会長 前は、ドライシステムの説明と学校の建物の更新の手法に関する説明を受けて 質疑応答をした。その手法には3種類があるということの説明も受けたが、その中 で、給食室を新設できるのは、建替えのときでないという説明があった。 校舎の更新のときに、どの手法を選択するのかは、全体計画を教育委員会が策定し て、どこかの学校で建替えが決定したときには、給食運営審議会にも諮ることになる のかもしれない。</p> <p>この審議会では、西東京市の中学校給食は親子方式を基本として考えてきたが、ひ ばり中と中原小の建替え計画に絡んで、仮称第10中学校だけは、特殊事情として自 校式の給食室を設置することに、皆さんとともに議論を尽くしてきた経過がある。</p> <p>このたびの諮問は、今後も親子給食は継続されるのだが、学校の建替え計画もあろ うし、今は決まっている親校と子校の関係も、揺るがないものなのか、という理由等 も含めての検討をしていかなければならない。これから長い将来には、色々な課題が 生じてくると思うので、どんなことが予想されるのかを再度確認しておきたいと思 う。</p> <p>○事務局 ただ今の会長のお話にもあったが、各学校の給食室が全面改装される場合と は、親校の校舎建替えが決定し、給食室もドライシステムに改修される時、または 子校の中学側が先行して建替えになった場合にも、給食室をどうするのか、というこ とが議論になるのかと思う。こうしたハード面での理由は、実は、全ての学校とも、 一定の年数が経過すれば、先月説明を受けた3つの手法の内、どの建築法で校舎の更 新を行うのかを必ず検討することになる。さまざまな調査・検討の後、一旦、今ある 校舎を全て取壊し、新築をするという場合に限っては、その学校間の親子給食の継続 を含めて再確認する機会が必要になるのかもしれないと考えている。</p>	

こうした校舎の老朽化等とは関係なく、校舎に大規模な改修が必要になるケースもある。一例として、大きなマンションの新築、或いは大規模な住宅開発などがあつた地域の学校では、その数年後には、児童数・学級数の増加に伴う校舎の増築や、クラス数増分を現在の給食室のキャパシティーでは賄えない場合を想定しておく必要がある。

例えば、親校である小学校の急激なクラス増が想定される場合、子校の中学校の給食数を加えると、食器をしまう消毒保管庫が足りなくなる、または調理器具類、特に炊飯器やコンベクションオープンなどが足りなくなり、親校としての機能が維持できなくなったときに、どう対処するのか。或いは、子校である中学校側に急激なクラス増が想定される場合にも、そのクラス増分を、親校の小学校だけでは賄いきれなくなるケースも考えられる。いずれのケースも、親校の給食室の増築が不可能という場合には、別の親校を模索しつつ、中学側への給食室の設置などのさまざまな選択肢から、こうしたケースの学校間の親子関係を再検討する必要が出てくると思う。

次に、これも極めて稀なこととは思いますが、中学校への配送が道路事情の変化で難しくなってしまうこと、例えば、搬送ルート上で一方通行路などの道路規制の変更があつて、配送車輛の入校が不可能になった場合、などが考えられると思う。

このような矢先のことではあるが、平成 29 年度予算には田無小学校の大規模改造工事に向けての基本設計費と、児童増に伴う増築の経費が計上されている。新年度予算案が議会を通過すると、来年度から平成 32 年度にかけての増築や現校舎への大規模改造工事がスタートを切ることになる。

まだ、正確なクラス増数は算出中ではあるが、ピーク時には、5クラス増との推計値もあつての今回の予算編成に至つたということなので、田無小・田無三中の親子給食が維持できるのかを、早晩考えなければならぬ。稀なことと考えていた例が、現実になりつつあるという報告であり、本日はこの事例を審議する場ではないが、西東京市内においても、まだまだ急激な人口の増減に気を遣いながらの行政運営が必要ということだと思ふ。

説明は、2つの大きな流れがあるということだが、いずれの時期には全校が必ず直面する校舎更新の手法によっては、給食室も全面改修・ドライシステム化を迎える。そのときに、場合によっては、親子関係の継続の再考が必要になるかもしれない、または、稀なケースではあるが、特定の地域事情によって大幅なクラス増が想定される場合なども考えておく必要がある、という整理になる。以上だ。

○会長 今回の説明によれば、校舎の建替え以外にも考えなければならない点があることがわかつたと思う。

説明に対しての質問はあるか。

(「特になし」)

校舎の建替えなどについては、教育委員会が計画を策定して順番に行っていくものであると思うが、計画できない部分としては、これは西東京市に限つたことではなく、遺産相続等の関係で農地の売却が発生し、そこにマンションが造成されると若い世代が入居し、近隣の学校での児童・生徒の数が急に増える。これは想定できることなのだが、増改築の計画には入れられない部分の条件である。

今の説明では、田無小の地域での児童数の増加によって増築が必要ということだが、そうすると田無小・三中の親子関係は、田無小の児童の給食を作ることで精一杯になってしまうと、三中の分を作ることが難しくなるという現実と直面する。その場合には、どうしなければならないのかを予め考える必要はある。

今日はこの具体的な問題の議論ということではなく、他の学校でも、同じようなことは発生する可能性があるということ踏まえておいてほしい。小学校の児童数が増えたことで、中学校の分を作るのが難しくなるということと、その逆で、ある中学の生徒が増えたことに対して、その親校だけでは給食が作りきれない、ということも起

こり得るということだ。こうした、児童・生徒数の増減、大きく減ることもあるかもしれないが、こうしたことによって親子給食をどのように継続していかなければならないのかということ踏まえておいてほしい。

答申に当たっては、あくまでも想定として提起しておき、実際には具体的な校名が示されて、条件が提示されれば、その都度議論をしていくほかにはと考えるが、考え得る条件の中では、どのような態度を示さなければならないのかについて、委員各位の考えを示してほしい。

子どもの数の変化ばかりではなく、道路事情によっても給食が届けられなくなることも説明を受けた。今は、最も合理的なルートでの配達を行っているが、ルート上の交通規制によって大幅な時間が必要になれば、考え直さなくてはならないことも理解できる点だ。予想外のことが起こるということだと思う。

事務局からは2点の想定外の事例が示されたが、ほかにあれば示しておいてはどうかと思う。

ここまでの件で、質問等はあるか。

(特になし)

説明を受けた事例等に対する方策を議論したいが、暫時休憩するので、2から3人程度でグループを組んで、相談した上で、発言を求めたい。

(暫時休憩)

○会長 再開する。

具体的な審議に入る前に、1点確認をしておきたい。

前回の説明では、給食室の新設は完全な建替えのときでないと難しいとの説明であったが、これは、絶対にそういうことであるという認識でよろしいのか。例えば、学校によっては、敷地が余分にあって、給食室を拡げるだけの予算が計上できれば、可能なのか。

○事務局 学校はそもそも敷地が大きいので、給食室の増築を考えることは可能ではあるが、その分は、例えば校庭が狭くなることなどが条件ということだと思う。

○会長 総合的な判断として、給食室を増築した方がよろしい、ということであれば、建替え・新築のときでなくても、給食室を改築することはできるということか。

○事務局 新築以外の長寿命化や大規模改造の場合には、給食室を含めた校舎の躯体や構造には手を加えずに、内装や外壁の改修によって、少しでも校舎を長く使おうという趣旨の工事のため、そのときに給食室を拡げようとするれば、極端な場合、第2給食室のようなことになってしまうので、現実的ではないという趣旨での説明であった。

仮定の話になってしまうが、総合的な判断をする中では「何とか給食室の増改築を検討できないのか」という議論も、必要な場合もあろうかとは考えるが、実際には、今の敷地内の給食室の位置などを考えると、結局不可能な場合が多くなるということだと思う。

○会長 田無小では、現状でも三中の分を作るためのスペースで、一杯一杯であるということ聞いたことがあるが、仮に、ピーク時に5クラスが増えた場合でも、三中の分を作らずに田無小の分だけであれば、給食室の増築は考えなくてもよいという計算になるのか。

○事務局 小学校5クラス程度の児童数が増えても、仮に三中の給食の配送がなく、単独調理校に変更になるのであれば、全く問題はなくなると思う。

○委員 親子給食の親校だからのことであると思うので、それが解消されるのなら全く問題ない計算だと思うが、実際には平成29年度中に、クラス増があるのか。

○事務局 まだクラス増はない。

○委員 了解した。

○課長 大規模改造工事とは、基本的な面積に手を加えずに行う手法であり、内装や外壁、屋上の防水などを施すためのものである。新しく給食室を拡げることになると、改めて建築確認を取り直す必要もあり、そのために校舎内にエレベーターを付けることが必要になるなど、法律をクリアするための別の工事が必要になってしまうことも想定されるため、敷地が広いから給食室を付けてしまうということには、なかなかならないと思う。法的な部分を考えて、学校ごとに考えていく必要がある。

田無小の場合は、立地的に広げる敷地の余地がないことから、今回の大規模改造工事のときには、手を入れるのは難しいと考えている。

○会長 調理室に手を入れるということは、色々な面からの制約があるということかと思うが、田無小の場合も給食室を拡げることは難しいが、三中の給食の配送を止めれば十分な広さということだそうだ。

このような点も含めて、各位の意見を述べてほしい。

○委員 児童・生徒の増員を見込んで施設を拡張した結果、いずれは減員に転じるということもあろうかと考えると、その施設が無駄になってしまうリスクも考えなければならぬと思う。

○委員 練馬区のことであるが、大きな団地ができたばかりの時には団地内に幾つもの小学校が必要になり、次第に高齢化が進行すると小学校の統合が発生する。一時的には親子給食を行っていた学校が、統合して自校式になったりしている。このことは、同じ団地内で起こったことであるので、比較的判りやすい事例とは思いますが、西東京市の場合は場所が離れていると簡単にはいかないのかもしれないと思った。

田無小は、駅から近いので、マンション等の関係での児童増なのか。

○課長 駅の近くのため、比較的賃貸の物件が多くあるためと聞いている。これだけが要因というほど単純ではないと思うが、永住する世帯が多い住宅地であると次第に子どもの数が減ってくるが、子育て世代の入れ替わりの激しい地域では、次々と新しい住民が入るために子どもの数が減ることは少ないようである。

○委員 田無三中の近くにはけやき小があると思うが、既にドライシステムも導入しており拡げられないのであれば、親校は無理なのであろうか。

○会長 ここまでの議論では、子どもの数が増えたときのことばかり議論してきたが、減ることも考えておくことが必要という意見が出た。児童が減るのには長い時間の経過が必要と思う。団地の高齢化が要因での児童の減少の例を聞いたが、小学校の統廃合が必要なときなどには、親校・子校の関係も見直すきっかけになるのではないかという意見だ。

親子関係を調整するためには、親校になる学校の調理室の広さや調理備品の数、配送のルート合理性など、色々検討して解決しなければならないことが多いと思うが、児童が減ってしまえばそれが無駄になってしまうというリスクも考慮しなければならないということだ。子どもの給食にとって一番相応しい方法を常に考えねばならない。

○委員 例えば、A校は児童数が増えたが、B校は減ったので、親校をAからBに変更しようと検討する場合、距離が遠くても可能なのだろうか。

○会長 特定の学校の児童の増減だけではなく、距離なども考慮しないと親子関係を見直すことはできないのではないかという意見かと思う。

○委員 距離の問題だけではなく、児童数のバランスに関しても検討材料なのではないかという趣旨である。大きな分譲住宅地が造成されると一旦は児童数が増え、いずれは中学生になって生徒数も増えるが、中学には給食室は設置できないので親校にはなれないので、そのままでは児童が減少する小学校の親校から生徒が増加する中学校に給食を運ぶことになる点には疑問を感じた。そこで、運ぶ距離は遠くとも、子どもの数のバランスを重視しての親子関係を考える必要があるとの意見が出た。

○会長 小学校の児童数の増は、将来の中学生の増につながる。そのときの親子関係は

どうなるのか、という疑問かと思う。

- 委員 今の疑問に関してだが、西東京市の親子給食の関係は小から中への配送だけのため、確かに児童増が生徒増に連鎖するのは当然のことだと思う。しかし、現状の親子給食のつながりは無視してほしくない関係だと思っている。現在は小と中は18校対9校で、中学には複数の小学校の卒業生が入学するため、その中学に対して運ぶことも必要と考えている。子どもの数のバランスだけでは、親校・子校の関係は作れないと思う。

総児童数と生徒数を比較した場合に、人数の少ない小学校からそれを上回る人数の中学に運んでいる例も数校あり、確かにバランスは取れていないが、現実としては起こっている。

まだ正式に議論になっていないことと思うが、ひばり中が初の自校式の中学になった後には、住吉小は親校から解除されるが、どうなっていくのか。他の中学の親校になるだけの機能は持っているが、地域的には近隣には中学はない。

疑問としてあげられている遠い中学校への配送の件であるが、親子給食の導入時にも時間をかけて議論を加えてきたことだが、配送時間の短縮は、衛生面が最大の理由ではあるが、さまざまな点で影響が多く、長距離の配送は極力避けてほしい。

- 委員 親校・子校の関係構築には、親校から子校にどれだけの生徒が進学するのも考慮してほしいと思う。田無小は一中から四中までの全てに分かれていく学校ではあるが、全く進学のない中学への配送はいかがなものかと思う。

距離の問題であるが、例えばスムーズな配送時には5分、10分の親子関係であっても、交通事情でそれが15分に変わることも考えねばならないし、何かトラブルがあった際のことを考えると、配送時間は短いに越したことはないし、配送時間が長ければトラブルへの対処が難しくなる。

- 委員 根本的な疑問なのだが、地域の現況として、碧山小の近くには多くの新築住宅が建築されているが、いずれは児童数が増えても一過性のことと思う。そうした想定内の児童増の対策として、給食センターからの配食を検討できないのか。親子給食にこだわらずに、考えることはできないのか。

- 会長 ただ今の疑問は、どこまで親子給食にこだわらなければならないのかということかと思う。

また、距離的な問題に関して言えば、配送時間が長くなると、その分を考慮して今より早く作り上げなければ間に合わなくなるという現実が出てくるという指摘が上がったと思う。時間的に急かされれば、トラブルも発生する可能性が高くなるだろうし、常に中学の給食時間に間に合うように作ることを逆算しての現在の配送時間とのことである。

- 委員 中学の食事の時間が12時半の場合だと、その2時間以内に調理を終了する必要があり、それを超えることは芳しくない。調理後2時間を超過すると、食中毒の危険性が飛躍的に大きくなることわかっているためだ。

- 会長 親子関係を決める際には、食べ始める2時間前までに調理が終わる距離でなければならないということも条件に入れる必要があるという報告であった。

- 委員 相続や道路という、学校では読めない事情がこれからも起こるのであるだろうか。大きな高層マンションや大規模な住宅地が現れて、この数年以内に複数の学校で給食室の機能が足りなくなるという事態が発生するのであるだろうか。

仮にそのような際の対応として、変化の都度話し合う考えなのか、或いはどのような事態にも対応可能なように給食センターを作ってしまうと固定化させてしまうのか。私は、想定できない事情を抱えたままで、その都度話し合いで決めていくという方法には疑問を感じるし、財政状況も何も考慮しなくても良いのであれば、全ての小中学校が自校式であってほしいと考えてしまう。

- 会長 西東京市の児童・生徒の将来推計は予想が立て難いのだが、想定外の事態が発

生しても親子給食は維持すべきなのか、そのときには再度給食のあり方を見直しを行うのか、ということであるが、それこそは、この審議会に諮るべき事項ということなのではないかと思う。しかし、課題としては上げておく必要はあると思っている。

○委員 関連しての発言になるが、中学は学校選択制があるため、新学期のギリギリまでクラス数が決まらないことが、毎年繰り返されている。最終的なクラス数が決まってから次年度の対応を協議しても間に合わないと思う。

○会長 学校選択制とは言っても、無制限に受け入れる訳ではなく、一定のルールのもとで、調整していると思うが、確かに最後までクラス数が決まらない実態はあるのだとは理解している。給食の立場から学校選択制を考慮する必要があるのかどうかは不透明だが、親子関係に影響が出ることも考えられるということか。

○委員 仮に、子校への配食が手一杯の状況にある学校で、さらに生徒数が増えた場合には、関係を見直す必要性は考えるべきと思う。

○会長 現行の親子校の間で、手一杯の配食をしている場合に、子校のクラス数が選択制度のためにギリギリまで生徒数が決まらないでいることから、親子の関係を見直すタイミングを図ることは難しいと思うという意見だ。

○委員 生徒数がギリギリまで決まらない現状では、学校の改修自体の見込みが立たないと思う。余裕がある学校ならば数クラス増えても対応はできると思うが、既に手一杯の学校に選択制度の影響が出ると対応は困難だと思う。

○委員 現状の親子給食校間では、親校から、あと何食くらいであれば配食可能ですよ、というような情報交換はしていないのか。

○事務局 ただ今話題になっている選択制度が要因で、翌年度から5クラスも6クラスも増えてしまうということは起こらない。そもそも、2クラス程度の増減であれば、現行の親子関係を揺るがすような事態は発生しない。

田無小の例もそうなのだが、翌年にいきなり5クラス増えますということではなく、4～5年の期間で徐々に増えていく想定が出されており、そのピーク時には、いよいよ現状の給食室の容量を超えてしまうという試算が出されたため、今から対処法を考えたいという1つのケースである。

○委員 青嵐中の特別支援学級であるが、現状でも会議室を潰して教室に当てているようだが、これからも増員されるのか。普通学級数を超えてしまうこともあるのか。

○事務局 公立学校なので、入学を希望する生徒は受け入れない訳にはいかないと思うが、極端な偏りは、全校で考えることである。

○委員 青嵐の特別支援学級には、遠くても良いので通いたいという親が多くいるということを知っているが、それが給食に影響は起こらないのか。

○課長 市の人口推計を基にして、児童数や生徒数を教育委員会でも計算しており、毎年のように学校別にクラスの増減が発生しているが、微増・微減に対しては、予算措置をして対応してきている。

想定が難しい一部の地域での人口の増減に関しては、学区域を見直す必要性や、どの学校に将来を見越して教室を増築しておくことが必要かといった検討を始めているが、この審議会での議論が必要な、特定の学校の給食室の機能が足りなくなるというケースは極めて稀なことと考えてはいる。

青嵐中の特別支援学級のクラス増に対応するだけの給食の配食能力は、現時点では心配していない。

○委員 あってはならない配送のトラブルの件だが、配送中に交通事故を起こすと中学には届かないことになると思う。或いはトラックが横転してしまったらどうなるのか。そうした事態の代替食はあるのか。

○事務局 この5年間になかっただけのことで、今後も絶対に起こらないということではないと思うが、これまでも、トラックから降ろしたばかりのコンテナを倒してしまっただけのことがある。1台だけであったため、中学の先生方の機転で切り抜けたことを

記憶している。トラックごと全滅してしまうことは想定しておかなければならないことだと思うが、恐らくは、急きょ用意できるのはご飯だけになるか、炊き出しのような状態になってしまうか、午前中で下校という判断が下るかもしれない。その時々判断かと思う。

また、車が途中で故障するということが起こり得るが、そのときには、配送が終わった車両が助けに行くということを行うことになっており、事故が発生する時間次第で、可能な限りの対応を探ることになっている。

- 会長 課題の1つとしてだが、車両の事故対応も考えておいた方がよいという意見かと思う。

急に子どもの数が増えることはないのか、という疑問に対しては、小学校の場合はゼロ歳児の数がわかれば、その6年後に入学する数も想定可能であり、中学にも、多くはその6年後に入学するという想定を立てさえすれば、突然ある年度に増えるということは考え難いそうだ。ただし、特定の地域に大きなマンションができて、その地区のみの人口が増える要素は否定できないという説明であったと思うし、そのことは課題として考えるべきと思う。マンションの場合は、売り出し価格から、どのような世代の人が増えるのかということは販売者も予想はしており、市との相談はしていると思うので、ある日突然児童数が増えたということは起こらないし、教育委員会もある程度の見通しは立てているからこそこうした話題になっていると思う。

- 事務局 市には都市計画があるので、1戸建ての住宅しか建てられない地域と、高層のマンションでも建築可能な地域というものが分けられているため、突然低層の住宅地の一角に、巨大なマンションが出現するというリスクはないし、昭和40年代にこの市でもあったような爆発的な人口増は、もう起こらないことだと考えている。

- 副会長 親子給食をどの学校間で行うのかという判断基準は、食数、道路状況や距離などを考慮して決めることになろう。ほかにも、天候によっては中学校への配送に大変手間取ることがあり、特に雪の日は苦労が多い。それでも、決められた時間内には絶対に届けなければならないのが給食である。その点も配慮事項になると考える。

ご存知のとおりで、できた食事を運ぶことばかりでなく、汚れた食器を全て小学校へ戻して、そこで洗ってから保管することも行っている。

トラックでの往復の作業が、親子給食には必要であるということも大きな配慮の必要な事項であることを加えなければならないが、大切な点は安全に運搬するということであろう。

このような状況の中でも食育の大切さは外すことはできない。更にはアレルギー対応も行っており、親校の小学校では、かなりの配慮を行いながらの給食提供ということが現状であるという点は踏まえておく必要がある。中学生に完全給食を実施するという事になった際には、考えられる方法としては現在の親子方式、自校式、給食センターを比較してきたという経過がある。もしも大きな敷地があつて、予算も自由になるのであれば、大きなセンターを作ってしまうと、全校が同じ給食を食べるということも選択できたのかもしれないが、予算にも限りがあるし、市の施策の問題もあるので、その考えや財源の範囲内で、どれだけ充実した給食を提供するのかということを考え続けなければならないことだと思う。

- 会長 私たちは、現状の親子給食に関する課題を洗い出して、報告していくということが今回の使命と考えたい。

想定外の事態や新たな課題の発生に関しては、そのときにじっくりと時間をかけて、審議会で議論するしかないということかと思う。

他に言い残しなどはあるか。

(特になし)

次回の日程等に関して報告してほしい。

- 事務局 次回は、5月の中旬以降の開催で、日程調整したい。

閉会

○会長 本日の会議を散会する。